

凡夫善惡の生れつきのまゝで、本願海に歸入する。然らば凡夫の心ばかりかといへば法の方からいへば、はや一念の時に他力の信水となつて、本願海に歸入するのである。そこで一帖目の終には、「凡夫のわろき自力のこゝろにてはたすからず、如來の他力のよき御こゝろにてたすかるがゆゑに、まことのこゝろとはまふすなり」と、のたまふ。機と法とを分けていへばかくのごとくである。其機と法とを一つにして仰せられた處では、「佛心と凡心と一つになる處をさして、信心獲得の行者とはいふなり」とある。是が凡夫のわろき自力のこゝろが轉じかはつて、疑ひはれて一心に彌陀をたのむ信心となつたのである。是は我心でなられたのではない、名號六字に誠心を封じ込めて、與へたまふによつて、この淺間敷凡夫心のまゝで、本願力を信するやうになつたのである。これが南無阿彌陀佛の六字丸丸貫ひ受けた相であります。こゝを「凡夫不成の迷情に、令諸衆生の佛智滿入して」と仰せられてある。然れば今『行卷』に、歸命の二字ともに、「本願招喚の勅

釋迦彌陀の二尊に仰せられたるがし

命なり」と仰せられたは、法に約しての御釋である。

三 次に歸命の二字を機に約しての御釋は、『銘文』に「歸命はすなはち釋迦彌陀

二尊の勅命にしたがひ、めしにかなふとまふすことばなり」と仰せられてある。

是は命の字を本願の勅命として、阿彌陀如來の御呼聲とし、歸の字を敬順の義と

して、順ひまかせることゝなる。たのむ者を必ずたすけるとの勅命に順ひ奉つ

て、たすけたまへとたのむ一念が、仰に順ひ召にかなふた歸命の一念である。よ

つて『御文』には、「ひとたびも、ほとけをたのむこゝろこそ、まことののりに、

かなふみちなれ」と、仰せられた。『御和讃』に二字ながら能歸になされた處は、

「天親論主は一心に、無碍光に歸命す」又「盡十方無碍光佛、一心に歸命するをこ

そ」とある。これらを御相承あらせられて、『御文』では、歸命の二字を「阿彌陀

佛後生たすけたまへと、たのむこゝろなり」と示したまふのである。この『御文』

の御化導は、祖師聖人の『行卷』の歸悅歸稅の御左訓に「よりかゝるなり、より

たのむなり」とある。よりかゝる、よりたのむとは、斯かるあさましきものを、
たのむばかりの御たすけと信じた一念は、勅命に順うて打まかせ、打もたれ、た
すけたまへとたのむ心より外はない。たすけたまへとは、たすけたまふ勅命に、
順ひまかせるこゝろをいふのである。かやうに頂いて見れば、祖師聖人の御釋と、
蓮如上人の『御文』の御示しとが一致であつて、我方から持かけてたのむのでは
ない。本願の勅命で、必ずたすくるぞとある喚聲に疑ひはれて、其勅命に打まか
せた思は、御たすけ候へのたのみごゝろで、法の方からいへば、たすけたまふ勅
命、機の方から云へば、たすけたまへのたのみごゝろ。祖師聖人は法を機に受け
る相で、「順ひ奉るなり」と仰せられ、蓮如上人は、行者の機が法に向ふ方から
言葉をたて、「たすけたまへとたのむ」と仰せられたのである、故に是全く一致
の御化導である。

祖師聖人も、天親讃では、歸命の二字ともに、機より法に向ふ方で御示しなさ

れてある。

六字の
三相

四 蓮如上人は『御文』の中に、「他方の信心をとるといふも、別のことにはあらず、南無阿彌陀佛の六の字のこゝろをよくしりたるをもて、信心決定すとはいふなり」とのたまひ、また「信心獲得すといふは、第十八の願をこゝろうるなり。この願をこゝろうるといふは、南無阿彌陀佛のすがたをこゝろうるなり」とも仰られてある。

南無阿彌陀佛の相とは、『御文』の中に三通の相がある。一には南無の二字はたのむ機、阿彌陀佛の四字はたすけたまふ法なりとある。これは、二字四字配當のすがたである。時にこの六字の名號を法に約せば、我をたのため、かならずたすくと喚びかけたまふ勅命となる、其勅命を行行者の方へ請けた處では、阿彌陀佛後生たすけたまへとたのみたてまつるが、南無阿彌陀佛の御意の頂かれた相である。天上の月が圓ければ、水にうつつた月影も圓いごとく、本願招喚の勅命が南無

阿彌陀佛の六字なれば、行者の信心も南無阿彌陀佛の六字、たのむばかりの御助けと信じたのゆゑ、阿彌陀佛後生助けたまへより外はない。

これが全く第十八願の三信である。第十八願の三信を天親菩薩は一心歸命とたたまふ。其歸命を祖師聖人は、「釋迦彌陀二尊の勅命にしたがひ、めしにかなふとまうすことばなり」と仰せられる。歸命と云ふにつき、種々の義があれども、祖師聖人は、歸は敬順の義、命は教命の義といふを御用ひあらせられて、「釋迦彌陀二尊の勅命にしたがひ、めしにかなふ」と御釋あらせられた。夫れを『御文』に、「歸命といふは衆生のもろくの雜行をすて、阿彌陀佛後生たすけたまへと、一向にたのみたてまつるこゝろなりとのたまふ。祖師は順ふを歸命とのたまひ、蓮如上人はたのむを歸命とのたまふ。一寸聞けば祖師の御釋と、『御文』の御示しと合はぬ様なれども、よくよく味うていたゞけば、釋迦彌陀二尊の仰せに順ひたてまつるが歸命ぢやと仰せらるゝも、後生助けたまへとたのむが歸命ぢやと

仰せらるゝも、全く一致である。夫はいかがぞと申すに、後生助けたまへとたのむは、人間同士の持掛けてものをたのむとは違つて、佛の方より我をたのめ必ず助けてやると、呼び掛けたまふ勅命に順ひ奉る一念が、即ち後生助けたまへである。或人が南無は願なりとあるゆゑ、南無とたのめとは、往生させて下されと願ふことなりと申さるゝそうなが、是は大なる誤りで、蓮如上人の仰せに「極樂はたのしむと聞いて參らんと願ひのぞむ人は佛にならず、彌陀をたのむ人は佛になる」とある。

たのむ
願ふ

然れば如來の勅命が行者の心へ徹到して、仰せに順ひたてまつり、助けられる一念は、助けたまへの思ひである。如來の必ず助けるとの慥な仰せを眞受に信じて、疑ひのなくなつた處が、後生助けたまへの歸命の一念である。若不生者不取正覺とは、たのむ者を必ず助けるとの御受け合である。悪人女人の後生の一大事を御身に引き受けて、必ず間違ひなく助けるとの御親切なる本願の御勅命が眞受

信じた
だけだ
はまだ
足らぬ

けになつて、疑うたがひなく遠慮ゑんりよなく御助けおたすにあづかりませうと、仰せ通りあふさほに順うて、

我手わがてにあまつた後生ごしやうありだけ助けたまへとたのむ一念ねんが歸命きみやうの一念ねんである。

五 又またあ或る人ひとは、信じただけでは足らぬ、助けたまへとたのむといはねば安心あんじんで

きないと申まをさるゝとうけたまはつたが、これもあやまりである。第一だい祖師そし聖人しやうじんの御

釋しやうに、不足ふそくをいふことになるのみならず、蓮れん如上人にやうじんの『御文』にも、助けたまへ

とたのむ御言葉おことばのない『御文』も澤山たくさんある。自問自答じもんじたふの『御文』には、五番ほんの問答もんたふ

を立てゝ、當流たうりやうの肝要かんやうをよくすぐつて御示おしめしあらせらるゝ所ところにも、助けたまへと

たのむといふ御言葉おことばはない。只ただ「およそ當家たうけには、一念ねん發起ほつぎ平生へいぜい業成ごふじやうと談だんじて、

平生へいぜいに彌陀みだ如來にやらいの本願ほんぐわんの我等われらをたすけたまふことはりをきゝひらくことは、宿善しゆくぜん

の開發かいほつによるがゆるゑなりとこゝろえてのちは、わがちからにてはなかりけり、佛ぶつ

智他力ちたりにきのさづけによりて、本願ほんぐわんの由來ゆらいを存知ぞんちするものなりとこゝろうるが、すな

はち平生へいぜい業成ごふじやうの儀ぎなり」と言のたまふ。又信心またしんじん獲得ぎやくとくの『御文』には、「南無阿彌陀佛なむあみだぶつのす

がたをこゝろうるなり」と仰せられてある。是等の『御文』には、助けたまへの御言葉はない。「彌陀如來の本願の我等をたすけたまふことはりをきゝひらく」とのみで、安心をあらはしたまひ、「南無阿彌陀佛のすがたをこゝろうるなり」とのみ仰せられて、助けたまへとたのむといふ御言葉はない。これを一往の御教化などと申して、何でも助けたまへとたのむと申さねば、安心にあらすと申すことは、甚誤りである。

鏡の蓋
をさされ
た姿が
うつる

六 御正意を頂けばあらゆる御教化皆一致で、其味ひを申さば「彌陀如來の本願の我等をたすけたまふことはりをきゝひらく」。「南無阿彌陀佛のすがたをこゝろうるなり」と仰せらるゝのは、助けたまふ本願名號の勅命を眞受にした相をのべさせられたもの。「又助けたまへとたのむ」とのたまふは、其助けたまふ勅命に疑ひはれて、阿彌陀如來なればこそと向ふ心を述べさせられたのである。鏡の蓋をとるなりうつるなり。うつつたまゝがさし向ひで、助けたまふ本願ぞと、行者の心へ

眞受けになつた時が、はや助けたまへとたのまれたのちや。うつると眞向になるとは一念同時にして、體は一つである。法を機に受けると、機が法に向ふとは、言葉は二つなれど體は一つで、一念同時である。

第八席 如來と我

一 昨日二字四字分釋の義をお話致したから今日は法も六字、機も六字とて、阿彌陀如來の方では六字ながら、助けたまふ法であつて、機の方では、六字ながら、助けたまへとたのむ機であると云ふ、六字六字の義を御取次ませう。天上の月が圓ければ、水中の月影も圓いが如く、阿彌陀如來の我等を助けたまふ法も、南無阿彌陀佛なれば、我等が頂いた信心も南無阿彌陀佛である。即ち『御文』一帖目四通には、「平生に彌陀如來の本願の、われをたすけたまふことは、宿善の開發によるがゆるぎなると、こゝろえてのちは、

わがちからにてはなかりけり、佛智他力のさづけによりて、本願の由來を、存知するものなりとこゝろうるが、すなはち平生業成の儀なり」と仰せられた。又御文三帖目五通には、「この南無阿彌陀佛の六字の名號の體は阿彌陀佛のわれをたすけたまへるいはれをこの南無阿彌陀佛の名號に、あらはしましたる、御すがたぞと、くはしくこゝろえわけたるをもて他力の信心をえたる人とはいふなり」と又、「この南無阿彌陀佛の體は、われらを阿彌陀佛のたすけたまへる、支證のために、御名をこの南無阿彌陀佛の六字に、あらはしたまへるなりときこえたり」と。又一帖目十五通に、「これによりて南無阿彌陀佛の體は、われらをたすけたまへるすがたぞとこゝろうべきなり」とあり。これらは南無阿彌陀佛を一つに約むれば、助けたまふ法である。又、二帖目十四通に、「されば南無阿彌陀佛とまをす體は、われらが他力の信心をえたるすがたなり。この信心といふは、この南無阿彌陀佛のいはれをあらはせるすがたなりとこゝろうべきなり」と。又、四帖

目十一通に、「抑南無阿彌陀佛の體は、すなはち我等衆生の、後生たすけたまへとたのみ申心なり」と。又四帖目十三通に、「彌陀の名をきゝうるこのあるならば南無無阿彌陀佛とたのめみなひと」と詠じたまふ。二字四字の義なれば、南無とたのめと仰らるべきに、南無阿彌陀佛とたのめと仰せられたは、六字六字の義門である。

此六字六字の義の時は、法の方では助ける一つ、機の方ではたのむ一つ全體南無阿彌陀如來は、助ける一つが御心ありたけである。五劫の思案も助ける一つ、永劫の修行も助ける一つ、助けるのけては、思案も修行もない。この御由を、『御文』五帖目第八通に、「それ五劫思惟の本願といふも、兆載永劫の修行といふも、ただ我等一切衆生をあなたがちにたすけたまはんがための方に、阿彌陀如來御辛勞ありて、南無阿彌陀佛といふ、本願をたてましまして」とのたまふ。この御言葉をよく味へば、五劫の思案ありたけがたすける思案、兆載永劫の修行ありたけが

如來は
爲物身

たすける修行。たすける思案とたすける修行の結晶體が阿彌陀如來ゆる、御身ありたけが助ける權化ちや。依つて曇鸞大師は爲物身と御名附けなされました。

二 爲物身といふは、物とは十方衆生のこと、爲とは助けるためといふこと依つて又方便法身とも名附けさせられました。時にこの方便法身といふに附いて、或他宗の僧が、本願寺の阿彌陀如來は偽りの阿彌陀如來である、正眞の阿彌陀如來は、善光寺の阿彌陀如來である。其證據には、本願寺より御免の阿彌陀如來の御裏書に、方便法身之尊形と書いてあると申されたので、大いに惑ふた同行があつた。是は知つて云はれたか、知らずにいはれたか、知らずに申されたならば、餘程の愚僧と申さねばならぬ。人に向うて説教するほどの者が、曇鸞大師の『往生論註』を拜讀せぬ様なことでは、説教する資格はない人と申さねばならぬ。若又知つて申されたならば、惡むべき奸僧と申さねばならぬ。

方便法
身とは

三 抑方便法身と申すことは、曇鸞大師が極樂淨土の盡十方無碍光如來の佛身

を判釋はんしやくあらせらるゝにつき名附なづけさせられたので、權假方便ごんげほうべんと誤解ごかいする者のなきやうに、正直しちうじきを方ほうといひ、己おのれを外ほかにするを便べんといふと、字註じちゆうまで、おそへ下くだされてある。正直しちうじきを方ほうといふとは、阿彌陀如來あみだにょらいの覺體かくたいは、眞如法性しんによほつしやうの道理だうりに叶かなふた御身おんみであるといふこと、己おのれを外ほかにするとは、御自身ごじしんの爲ためではなく、一切衆生さいしゆじやうを助たすくる爲ための御身おんみといふことである。親鸞聖人しんらんしやうにんは五劫永劫ごふえうごふの御苦勞ごくらうを案あんじ見るに、併しかしながら親鸞一人しんらんひとが爲ためなりと、御喜およろこびあらせられた。すれば助たすけたまふ御佛みほとと信しんせねばならぬ。又御心またみこころはと尋たずねて見みれば、佛心ぶつしんとは大慈悲だいじひこれなりとあるからは、拔はつ諸生死勤苦しよしやうじんく之本ほんと、苦くるしみの根ねをぬき、爲み作大安さだいあんと、安樂あんらくを與あたへて下くださるゝが、阿あ彌陀如來みだにょらいの御心みこころなれば、御心みこころ一杯はいが助たすけるといふより外ほかはない。又御聲またみこゑありたけが助たすけるより外ほかはない。善導大師ぜんだうだいしは四十八願しよんじちはつがん懇懃こんこんに喚よぶと仰あふせられて、御命ごいのちがけの御喚聲およびこゑである。大音宣布響流だいおんせんぶきゆう十方じゆうほうとあるからは、十方微塵世界じゆうみぢんせかいへひゞき互わたる御喚聲よびこゑは外ほかことはない、我われをたのため、かならずすくふとの仰あふせより外ほかはない。つゝ

まるどころは、阿彌陀如來は助ける一つが御用である。其佛心が行者の心底に徹底して見れば、たすけたまへの一念より外はない。

よべばよふ、よばねばよばぬ谷底に

答ふる聲はよふひとの聲

我等が心に、たすけたまへとたのまれたのは、全く阿彌陀如來の、本願招喚の勅命の、至りと書いて下されたのである。其御喚聲が六字なれば、聞信の一念も六字より外はない。これで六字六字の義は解つたであらう。

四 次に南無の二字と阿彌陀佛の四字とは、一體にして離れぬと申すことを述べます。これは少々むつかしいが、肝要なことだから、辛抱して聽聞してください。

先づ機法一體といふことは『御文』三帖目第七通に、「南無の二字は衆生の阿彌陀佛を信ずる機なり。次に阿彌陀佛といふ四の字のいはれは、彌陀如來の衆生をたすけたまへる法なり。このゆるぎに機法一體の南無阿彌陀佛といへるはこのこゝ

二字
不離
の義

ろなり」。『同』四帖目第八通に、「このゆゑに、南無と歸命する機と、阿彌陀佛のたすけまします法とが、一體なるところをさして機法一體の南無阿彌陀佛とはまをすなり」。『同』第十一通、「されば彌陀をたのむ機を、阿彌陀佛のたすけたまふ法なるがゆゑに、これを機法一體の南無阿彌陀佛といへるは、このこゝろなり」。『同』第十四通に、「このゆゑに南無の二字は、衆生の彌陀をたのむ機のかたなり。また阿彌陀佛の四字は、たのむ衆生をたすけたまふかたの法なるがゆゑに、これすなはち機法一體の南無阿彌陀佛とまをすこゝろなり」と、右四ヶ處に御示しなされてある。

此中二ヶ處まで、「といへるはこのこゝろなり」とあるからは蓮如上人の初めて立てたまふ名目ではない。前に機法一體といふことを、申した人がなければならぬ。夫は何れなりやといふに、覺如上人や存覺上人の御言葉の中にあれども、『御文』とは、義が別であるゆゑ、『御文』の御據とは申されぬ。

五 抑 六字名號を機法一體といふことは、西山家にいふことで、近くは『安心決定鈔』に、度々出てある。夫を隨宜轉用して六字の名號の上で、機法一體の義

を談じたまふたものと伺はれる。さりながら、義は大に違ふ。先づ『決定鈔』の

こゝろは、生佛不二の替言葉で、十劫の昔、阿彌陀如來の正覺御成就の時、十方

衆生の願行も、ことごとく圓滿して、佛の正覺と衆生の往生と、一體に成就し終

りて居る。衆生の機と阿彌陀佛の法と、衆生と彌陀と生佛一體ゆるゑ、それを機法

一體といふ。夫を今まで知らなんだゆるゑに、迷ふたれども、このたび其生佛不二

の譯をきゝてさては我往生は、十劫曉天にすんであると知つた處が、歸命の願心

の起る所で、其時正覺の一念に立ちかへりて、衆生本來成佛の理に契うて、衆生

と彌陀と一體なりといふが、西山流のいひ方である。

六 今蓮如上人は、其名目は借り用ひたまへども、義は天地雲泥の違である。「南

無の二字は、衆生の阿彌陀佛を信ずる機なり。次に阿彌陀佛といふ四の字のいは

れは、彌陀如來のたすけたまへる法なり。このゆるゑに機法一體の南無阿彌陀佛といへるはこのこゝろなり」と仰せられる。是は法體の名號の上で、南無の機と阿彌陀佛の法とを、機法一體に成就したまふといふことを、述べさせらるゝので、南無は衆生が彌陀をたのむ機、阿彌陀佛は佛が衆生を助けたまふ法なれば、衆生と彌陀と、能歸と所歸と、機と法と、土臺差別ありて、一體ではなき様なれども、其衆生の南無と歸命する能歸の信も、凡夫の方で拵へた自力のたのみではない。十劫正覺成就の時、佛の方に、衆生が歸命する様に、衆生のたのむ機までも、南無の二字に御成就下された其六字を、衆生に回向して歸命せしめたまふ。然れば、衆生が南無と歸命するも、法の方からまうせば、佛の方より歸命せしめたまふのである。又所歸の阿彌陀佛も、其たのむ能歸の衆生を助けたまふ法ゆるゑ南無に離れぬ阿彌陀佛である。然れば法藏因位の昔に、衆生になり代つて、願を發行を修し、終に十劫正覺の時、衆生のたのむ機の方は南無の二字に成就し、助けたま

ふ法ほふの方かたは阿彌陀佛あみだぶつの四字じに成就じやうじゆして、南無阿彌陀佛なむあみだぶつと御成就ごじやうじゆなされたが、機法きほふ一體たいの南無阿彌陀佛なむあみだぶつなりと仰あふせらるゝが、蓮如上人れんによじやうじんの思召おぼしめしである。故ゆゑに西山流せいざんりうの生佛一體しやうぶつ たいとは、天地懸隔てんちけんかくの相違さうゐである。

西山は
生佛一
體

七 西山流せいざんりうでは、生佛一體しやうぶつ たい故ゆゑ、十劫じふこふの昔佛むかしぶつの正覺しやうがくと同時さうじに、衆生しゆじやうも本來成佛ほんらいじやうぶつし終をりて居ゐるといふ。今家こんけでは、法體ほつたいの名號みやがうに、南無なむの機きと阿彌陀佛あみだぶつの法ほふとを、機法きほふ一體たいに成就じやうじゆしてはあれども、行者ぎやうじやの方かたへ信受しんじゆせぬ間あひだは、我等われらは矢張迷やはりまよの凡夫ほんぶなり、彌陀みだは證まうりの佛ぼふなり、なか／＼一體たいではない。然しかる處宿善開發ところしゆくぜんかいほつして、この名號みやがうの謂いはれを聞き開ひらいた時とき、他力回向たうりきわうに預あふるゆるゑに、其法體そのほつたいの名號みやがうに、豫かねて成就じやうじゆしてあつた機きと法ほふとが、其儘行者そのま、ぎやうじやの方かたに印現いんげんして、行者ぎやうじやは南無なむとたのむ、阿彌陀佛あみだぶつは攝せつ取しゆと攝おさめ助たすけさせらるゝと仰あふせらるゝが、蓮如上人れんによじやうじんの思召おぼしめしである。紛まぎれぬ様やうに頂いたいて下ください。

八 時ときにさればかやうに紛まぎらはしき名目みやうもくをば、なせ御用おもちひ遊あそばしたぞと申まをせば、

こんな
紛まぎらば

し
目
な
使
な
ふ

これには譯のあることで、全體『御文』の御教化は、當機をかながみて、百あるものを十に、十あるものを一にして、いかなる愚な者でも、合點のしやすき様に、筆どころをつくさせられての御認めである。就中、祖師聖人御一代の御化導の肝要は、他力回向の信心といふことである。其宗義を愚な者に、合點のし易い様に聞かせるには、この機法一體の南無阿彌陀佛といふが、甚聞き分け易い故に、生佛不二の義を切り捨て、唯名號に衆生のたのむ機も阿彌陀佛の助けたまふ法も、機法一體に成就してあるといふ義に轉用したまふ、巧妙なる御化導である。御化導が頂かれて見れば、行者の能信も機法一體であらねばならぬ。若も後生助けたまへとたのみたれども、未だ御助けが信せられぬといふ様な、御助けの離れたたのみごゝろなれば、他力回向の信心ではない。又御助けは信じたれども、阿彌陀如來はたのまれぬといふやうな、たのみごゝろの離れた信じごゝろなれば、眞實の信心ではない。他力回向の眞實の信心なれば、たのむ一念は、御助け治定

の思おもひ、御助おたすけを信しんじた一念ねんは助たすけたまへとたのむ思おもひである。

宮部老師の法話は、明治から昭和まで長い間、布教界に於ける重鎮として、其名は海の内外まで鳴り響いてゐます、ごうかこれを筆録して後代に傳へたいのですが、今まで出版せられたもの一冊もありませんでした、本稿は成就文説教としてまだ完結せられてゐませんが、ともかくもこれを傳へ得た事は本全書が誇りとすゝる所です。幸に老師には健在なれば、續稿を頂いて本書を飾る事が期待せられる所であります。(編輯局)

願成就文説教畢